

# 日文系としての台中学

## —主に寺廟の紹介を通して—

北川修一

### 1. はじめに

2024年7月、本誌編集委員会から「台中にある廟や寺など歴史、宗教をテーマに先生のご専門の視点から」何かを書くように依頼された。専門としてこれまで研究成果を発表してきた分野とは距離があるが、過日、学科内の勉強会で趣味的に資料を集めたり、フィールドワーク的なものを行ったりしたことを発表させていただいたご縁によるものであると思う。

まず、「台中学」とはどのような意義を持つものか、そして日本語学習者にとってそれがどのような意味を持ちえるのかについて、私なりに考えてみたい。

地域名を冠した「〇〇学」、「〇〇研究」は、第一義的には歴史、文学、社会など、それぞれの方法、領域の枠を超えて、総合的、学際的にある地域を検討するという目的があると考えられる。では、国名を関した「日本学」「台湾学」「フィリピン学」などと、さらにその中の小さい単位を冠した、ここでは「台中学」であるが、それらとの意味は同じであろうか。もちろん、学際的に台中を見直すという意義も当然あるではあろうが、「台中学」と言った場合と、「台湾学」と言った場合では、我々住民にとって、距離が大きく異なる。物理的にも当然のことであり、また台中という地方自治体が支援しているということもあるだろうし、あるいは研究機関に所属する研究者ではなく、地元の、中国語で「文史工作者」と呼ばれる在野研究者が大きな役割を担っているということもあると思う。いずれにしても、「台中学」とは、我々台中の住民にとって、学術として日常から乖離したところにあるものだけではなく、日常生活の中で今の台中を起点に、過去、未来にわたって様々なことを考える術でもあると考える。「台湾学」もそのような意味合いを持ちうるかもしれないが、台中の住民にとっては「台中学」のほうがより身近である。もちろん台中だけではなく、それぞれの小さい単位での地域学はそれぞれの地域の住民にとって身近なものでありうる。

次に日本語学習者にとっての「台中学」について考えてみたい。特に学習者と限定したのは、例えば教員が研究者として台中について研究しようとした場合、それぞれすでに培ってきた領域からの見方があり、あえて規定、整理する必要もないように感じるからである。

日本語に限らず、外国語学習者は当該地域の言語や文化にはそれぞれ偏りはあるであろうが、興味を持って熱心に学ぶ。また一方で、「外国語を学ぶ目的」について、「言語はコミュニケーションの道具である」というようなことが言われて久しい。その意味合いは実はむしろ「道具に過ぎない、そのために、別に何かほかの目的を持ち、付加価値をつけなければならない」という意味に用いられているように感じる。このように、言語をある意味で無色透明なもののように扱うことは、特に AI が発達した今日、言語学習の意義を失わせるのを裏付けする側面を持つようにも思われるが、我々は言語によってコミュニケーションをとっているのは事実であり、日文系でも言葉そのものを技術として習得することが教学において大きな比率を占めている。そして、コミュニケーションには情報を受け取る行動と、情報を発信する行動が含まれるが、情報を発信する場合、すでに母語として知識の中に存在するものを外国語に置き換えさえすればいいのであろうか。それで済む場合もあるであろうが、何を発信するかという問題については、自分自身についてすら、必ずしも容易に表出できるものではない場合もある。外国語を学ぶものが、その外国語をコミュニケーションに用い、自分に関する情報を発信する場合、それは無意識に自己の中に蓄積しているものだけではなく、意識して多くの自己の蓄積の中から切り取り、形にしていかなければならないということもあるであろう。外国語を学ぶものにとって、自分とその自分を存在させている環境がどのようなものであるかは、絶えず思考し続けなければならないものなのではないだろうか。このように考えた場合、台中の大学で日本語を学ぶものにとって、「台中学」の意義は大きいと考える。

また、外国語を学ぶものが何を発信するかという点は常に考えていくことが必要であると思うが、本学系では4年次に「専題研究」という研究、作品の作成を行う科目が必修とされているので、これをそのような営みの総まとめの形の一つとしても一部言及する。

## 2. 台中学の中の寺廟文化

宗教はどの国においても、日常生活と大きくつながりを持ち、また宗教的建築物は、観光スポットとしても注目を集める。日本を含む多くの外国人からも寺廟は注目される。日本からの観光客は

台湾の寺廟を訪れ、老人のみならず、若者が線香を手を熱心に祈りをささげる姿を見て、驚き、敬服する。また、これは家庭環境にもよるが、子供のころから、地域の寺廟の行事にかかわっている学生は少なくない。ただし、行事に参加はしても、その宗教的な意義については理解していないことが多い。

また、ここ数年で、台湾の学術は本土化が進み、台湾のものにも目が向けられ、研究が深められ、さらに学術のバリエーションも大きく広がった。寺廟に関して言うと、かつて在野であった「文史工作者」が学位を取得し、機関に所属する研究者となり、台湾の宗教文化に関する領域が高等教育機関で教授される領域の一つとなっている。台湾における道教、仏教の歴史、各寺廟の歴史、各寺廟に収蔵される匾額、香炉、神像などの収蔵品などの美術的な評価、あるいは寺廟、収蔵品の修繕保存などに関する研究、実践も進んでいる。

これらのものは、多くの日文学系の学生が全面的に容易に吸収、消化し、そのうえで自己の知見を見出していくことは難しい。しかし、日本語学習者にとっての「台中学」の意義は、必ずしもそこにはない。これらは専門的な学術としてのものであり、個人の生活と必ずしもかかわっているとは限らないものであり、主目的は自分、あるいは自分を取り巻くものについて、自分が学ぶ言語を使って発信する内容を形作ることだからである。そして、その自分、あるいは自分を取り巻くものは、自分というものが主軸にある以上、自分という存在、自分という視点が必要であり、その内容がどれだけ詳しくあっても、本やネットの情報のコピー、AI にまとめさせたもの、それだけでは成り立たないはずである。

### 3. 台湾の寺廟のなかから選び、切り取り、深める

自分という視点から寺廟を選ぶとすれば、父母、祖父母に連れられて参拝する寺廟を様々な面から調べてみるというのもいいであろう。単にどこにでもある普通の寺廟と考えるのではなく、どこに面白さがあるのか、自分なりに探してみることも面白い。寺廟の歴史、寺廟に伝わる伝説、寺廟に祀られる神々の紹介、壁画に描かれた故事の説明などのほか、最近では日本でいうお守りも各地の寺廟でいろいろなもの配布されている。また神像が描かれたお札である「大符」はかつては物資の乏しい、貧しかった社会において自宅で神像を祀るために版画によって作成されたものであったと言われる。社会状況は変わったが、「大符」は一部の寺廟ではなおも発行され続け、そ

の後は専門の画家に描かれた精緻な神像のものもあられ、地元の信者が求めるだけでなく、「大符」のコレクターもあられている。ただコレクターの出現によって、さまざまな問題も付随して生じているようであるが。また、子供のころから参拝していた寺廟であれば、アルバムを探せば昔の寺廟の写真も出てくるかもしれない。また地元の信者と寺廟のつながり(信仰的なものから、供え物、特別な料理などまで)は必ずしも外のものもすぐ知りうるものではなく、またネットの検索で得られるとも限らない。これらのものを完成するには、過去の自分を振り返り、自分と家族との関係を見直し、また寺廟を含めた近隣の方々へのフィールド的な調査も必要であろう。

かつて「專題研究」のテーマとして、苗栗出身の学生は、おじいさんが「神猪」(極限まで太らせた神への捧げものとしての豚)のコンテストで一位をとった経験をもとに、地元の寺廟の行事について詳細に紹介してくれたことがあった。

#### 4. 台湾の寺廟の中の日本

寺廟文化に興味を持って、必ずしも子供のころからこのような経験があるとは限らない。その場合、何らかのテーマを決めて切り取るということもできるであろう。実現の可能性はにおいて起き、思いつくものを挙げてみると、例えば「西屯区に土地公廟はいくつあり、それぞれどのような歴史があるか」、「台中にはいくつ月下老人を祀る寺廟があり、評判はどうか」などはどうであろうか。

残念ながら、私は台湾で生まれ育っていないので、自分の生活とつながったテーマは思い浮かばないが、時間のゆるすままにいくつもの寺廟を回るにつれて、日本と関係のある寺廟がいくつかあることが分かった。ここではどのように掘り下げるかは今後の課題として、日本と関係のある仏教、道教の寺廟を紹介してみたい。

##### (1) 大甲区鉄砧山国姓廟

鄭成功を祀る寺廟は多いが、ここでは日本人の母親、田川マツが神格化し祀られている。

##### (2) 北区宝覺寺

現在でも日本の臨濟宗妙心寺派に属す。大雄宝殿(本殿)は日本時代のものであり、内部には日本時代の匾額を掲げる。寺内には、歴代妙心寺派管長から送られた碑、水子観音

などがある。また、本門仏立宗と刻まれた灯籠、孝道教団から送られた碑、羽田岳水の句碑などがある。ほかに、日台仏教交流の象徴と言われる友愛鐘楼がかつてはあった。あるいは、日本統治時代に台湾で亡くなりその後祀るものいなくなった遺骨を集めた「中部地区日本人遺骨安置所」があり、後に「北部地区日本人遺骨安置所」もここに置かれることになった。さらに、台湾出身日本軍人戦没者の慰霊碑もある。

### (3) 台湾三十三観音

日本統治時代、台湾で布教を行った東海宜誠を記念するために、北部、中部、南部にそれぞれ三十三か所の霊場と二か所の番外がおかれ、日本の彫刻家亀谷政代司による「孝養観音」が置かれた。三十三か所の霊場のうち、台中には西区大覚院、北区宝覚寺、南区慈明寺、南区仏教会館、霧峰区万仏寺、烏日区善光寺があった。ただし、2024年霊場が大きく変更され、東海宜誠や当初おかれた「孝養観音」との関係はかつてほど密接なものではなくなっているようである。

### (4) 梧棲区朝元宮

ここは媽祖廟であるが、中に日本の岐阜市長（当時）上松陽助と宗教法人日本媽祖会代表役員高橋夏三郎からの書簡が飾られている。これらの由来等について、詳細は不明であったが、中塚亮（2021）「岐阜に請来された媽祖について：戦後日本における媽祖信仰受容の一例として」『東方宗教』で詳細に紹介されている。またこの日本媽祖会の活動によって、台南の大天后宮には岐阜市長（当時）上松陽助による「霧顯扶桑」の匾額が、雲林の馬鳴山鎮安宮には岐阜市長（当時）蒔田浩（上松陽助の岐阜県知事当選による後任）による「鎮國安民」の匾額がそれぞれ掲げられている。

それぞれ違った角度のものをいくつか挙げたが、何らかのテーマを一つ設定し、切り取るのはこの作業の第一歩であろう。個人的には上記の幾つか（1を除くほかの3つ）は私の郷里、岐阜とかかわりを持つのであるが、そのような角度からの紹介も可能であろうか。

## 5. おわりに

言語を学ぶものとして、学習対象言語の文化を学ぶだけではなく、コミュニケーションの中で、自分自身や自分を含むそれを取り巻くものをどのように表出するという事は、常に考えられるべきものであろう。

ここでは私が個人的に趣味としている寺院巡りを例に書いたが、ほかにも多くの視点をあげることができるであろう。例えば、1950年代以降、アメリカから大量に小麦粉が輸入されるとともに、台中では主に豊原を中心に「糕餅(焼き菓子)」作りが盛んになり、「糕餅の町・台中」としての知名度も既にある程度ある。この時にもたらされたアメリカの小麦粉により、台湾では「糕餅」の他、外省人の飲食文化である粉食が急速に普及し、日本では学校給食にパン食が取り入れられるなどして、食の欧米化を促すことになったなどの対比も面白い。

また、台中は、清朝時代、福建省から分離し台湾に省が置かれた当初、省都が置かれようとしていたところであり、日本統治時代の台湾議会設置運動の中心的人物、林献堂の出身地であり、その生家は霧峰林家花園として残っている。更に、1998年、台湾省の省政府の機能が凍結されるまでは、台中市霧峰区には台湾省議会が置かれていた(台湾省政府は南投県に置かれていた)。「政治の町・台中」として切り取ることも可能ではないであろうか。

このようなテーマはアイデアによってさまざまに設定することができるであろう。これらは当然それぞれの領域の専門家が学術的な研究を行っているではあろうが、また別に、台中に暮らし、外国語を学び、外国人と接するものが、住民の目線からそれぞれに切り取り、アレンジをして紹介する、そのような意味での台中学というものを、もっと意識するべきではないであろうか。

(北川修一 きたがわ しゅういち 東海大学日本語文化学系)